The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベルクソンにおける自由と直観について ： 「働く」時間と否定の力を通して
Author(s)	平野, 一比古
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23079
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏　　名	平（ひら）　野（の）　一比古（かずひこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文学）
学　位　記　番　号	第　２５６９７　号
学位授与年月日	平成 24 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	ベルクソンにおける自由と直観について ―「働く」時間と否定の力を通して―
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　望月　太郎 （副査） 教　授　上野　　修　　同志社大学文学部准教授　ミシェル・ダリシェ

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、A4版で総頁数138頁、400字詰め原稿用紙に換算して約400枚、序論、４つの章、結論及び文献表から成る。ベルクソンの哲学的探究の「出発点」における反省の核心を「働く」時間の発見と、この発見をもたらした直観の持つ否定の力に見て、『試論』における「持続」、『創造的進化』における新しいものの創造として自由、そして晩年の「可能的なもの」の観念に関する回顧と錯覚をめぐる論考など、およそベルクソン的と考えられるすべての主題がこの「出発点」の洞察に由来することを一貫して主張する。

第１章では、その「出発点」を、『可能的なものと実在的なもの』におけるベルクソン自身の証言、1908年5月のベルクソンからW・ジェイムズに宛てた書簡、1922年のデュ・ボスの日記、その他の補助資料を用いながら、1881年～84年頃と推定した上で、まずこの「出発点」における反省の核心を「働く」時間の発見にあるとする。そしてその発見は、科学の時間すなわち法則の予測を本質とする時間を意識に固有のものではないとして否定する直観の持つ否定の力によってもたらされたと主張する。その際、反省の原理となっているのは、存在するものは「働く」、時間が存在する、それゆえ時間は「働く」という推理である。このとき直観の直接の対象は「漠然と」経験されているにすぎないが（そして、無論、のちにその対象は持続であると同定されるが）、しかし少なくともこのとき「別のものがあるということに気付いた」という点では、それは決定的な経験であると言える。

第２章では、自由が論じられる。ベルクソンにおいて自由とは、第一に「内的状態の外的な現れ」であり、また「具体的自我と自我の果たす行為との関係」である。行為が根源的自我の原初的衝動（「内的な推力」）によって促される限りにおいて、行為は自由であると言われる。第二に、自由は創造である。自由な行為は、自我の含み持つ「より以上」のものを創造する。ベルクソンは選択の自由を否定する。選択は、空間において並置された選択肢を前提とするが、そのような並置は時間の「働き」を無視した錯覚であると論じられる。

第３章では、直観が、否定の力を持つ直観と直接的直観の二つに種別され、前者がより根源的であり、否定の力を持つ直観が対象と一体化する共感的直観を支え、確実性を与えるのだとの主張が展開される。例えば、時間が不可分であるという持続の直観は、「出発点」における科学の時間の否定によって確実性を与えられていると考えられる。

第４章では、「可能的なもの」の観念に関する回顧と錯覚についてのベルクソンの晩年の論考が主題化される。実在が「可能的なもの」の観念として先在すると考えるのは、じつは錯覚であり、自由な時間の「働き」の創造性を見誤った思考であると論じられる。意識には新しいものを創造する自由があるが、新しいものは意識の内に可能的な仕方で先在するものではあり得ない。

最後に、自由と直観、「可能的なもの」に対する批判をめぐるベルクソンの哲学的探究は、すべて「出発点」の反省、すなわち「働く」時間と否定の力を持つ直観についての反省のうちに含まれていたのであり、それゆえこの「出発点」に注目することでベルクソン哲学の根源に触れることができると結論される。

論文審査の結果の要旨

さて、以上のような主張に対して、審査委員としての評価は、以下の通りである。

「出発点」への着目は独創的であり、ベルクソンに独自の哲学的探究の展開過程を実証的に詳らかにする上でも有益であると高く評価できる。

第１章における「出発点」の時期の特定、その内容の吟味は、従来の研究の欠落を補うものであるという点でも有意義である。しかし、他方、ベルクソン哲学の主要概念である「持続」から「働く」時間があたかも別なものとしてあるかのように、それを実体化して捉える傾向はミスリーディングである。そうした捉え方は、ベルクソンが『形而上学入門』で論じている哲学的直観と切り離されて別種なものとして否定の力を持つ直観が存在するかのように論じる点と通底している。

第２章及び第３章で論じられる、自由や直観をめぐるベルクソンの思考のすべてを「出発点」に還元しようとする論法も、強引であるとの誹りを免れないであろう。評者の立場から言えば、直観はあくまで対象を直接的に捉えるものであり、直観の持つ否定の力は、いかにそれが「漠然と」したものであろうとも対象の直接的把捉としての直観に内在するのであって余処にではない。

第４章での「可能的なもの」の錯覚に関する議論についても、上と同じことが言える。また、論文の全体を通して『可能的なものと実在的なもの』という小品に対して過大な評価を与えそれに頼りすぎているのではないか、他の主要著作の検討が不十分なのではないかという疑念も拭えない。

しかしながら、本論の独創性は、以上のような問題点にもかかわらず、本論文の荒削りであるとはいえ骨太な主張の強固さを損なうものではない。よって、本論文が博士（文学）の学位を与えるに値するものであると評価する。